

卵子凍結で産み時選ぶ日 血液がん患者には未婚でも認められて

出産にいい時期が来るまで若い卵子をとっておきたい。
そんな夢が日本でもかなう日が来るかもしれない。技術はトップ級だ。

「私、不妊なんだ」

名古屋市在住の看護学生、花原なぎささん(22)は昨年、ボーイフレンドにこう告白した。そして一言付け加えた。

「でも卵子を2個、凍結保存してあるから」

不妊を打ち明けることにはかなり迷い、悩んだ。勇気を出せたのは凍結卵子があったからだ。

花原さんは16歳の時、悪性リンパ腫になった。医師から、血液を作る源泉である造血幹細胞の移植を勧められた。移植の前には非常に強い抗がん剤治療でがん細胞をたたくため、不妊になる可能性がかなりある、と説明された。

「子供も産めないんだ」

追い打ちをかけられた気分になった。当時、すでに人生に絶望的になっていた。同じ病棟の患者が次々に亡くなっていた。水族館で働きたくて水産高校に進んだのに、その夢を実現させることも、結婚することも、もう無理かもしれない、という気がしていた。

そんな時、白血病で骨髄移植を受けた先輩患者から「卵子凍結」を紹介された。

「その話を聞いたとき、真っ暗な人生に一筋の光が差し込んだように感じました」

花原さんが紹介されたのは、加藤レディースクリニック(東京都新宿区)だった。同クリニックは当時、新しい卵子の凍結保存法を開発し、臨床応用を始めていた。

移植前の抗がん剤治療では吐き気が止まらず、「死んだほうがまし」と思ったこともあった花原さんだが、何とか耐えられたのは、

「卵子があるから、いつかは結婚して子供を産めるかもしれない」

という希望があったからだ。

●成績良いガラス化凍結

それから6年。花原さんのようにがんの治療前に卵子を凍結保存できた未婚女性は、それほど多くない。というのは、不妊治療などを手がける医師が集まる日本産科婦人科学会(日産婦)の会告(指針)では、卵子凍結は、法的に結婚している女性にしか認められていなかったからだ。

法的拘束力はない指針だが、積極的に取り組んできたのは、加藤レディースクリニックをはじめとする一部の民間の産婦人科のみだった。

それがこの1、2年で、がん治療をする医師たちの多くに「副作用で不妊になる可能性に配慮して、事前の対策が必要だ」という認識が広がってきた。

今年1月、ようやく日産婦の小委員会は未婚の女性の卵子凍結を限定付きの「臨床研究」という形ながらも公式に認めた。当面は、血液がんの患者に限られ、実施できるのは9病院だけだ。※1

日産婦が卵子の凍結保存に慎重な姿勢を取るのは、主に二つの理由からだ。

ひとつは採卵のためにがん治療が遅れてはいけぬ、という懸念。もうひとつは、採卵はリスクを伴うにもかかわらず、凍結保存の成功率が低いという点だ。卵子は受精卵に比べて細胞が弱い上に染色体もばらばらになった状態なので、従来の方法では、凍結後の生存率は受精卵よりずっと低い。

が、加藤レディースクリニック先端生殖医学研究所の桑山正成研究開発部長は、2点にこう反論する。

「私たちは治療に余裕がある場合でなければ凍結保存はお受けしませんし、独自に開発した細い針で採卵するので、出血する可能性も非常に低い。生存率も私たちの方法では受精卵の凍結にほとんど劣りません」

桑山さんが2000年に開発した、特殊な卵子凍結保存方法は、「ガラス化凍結法」と呼ばれる方法の一種だ。細胞内の水分を抜くような特殊な溶液に卵子をつけて、急速に凍結させる。

●働く女性の相談相次ぐ

従来の方法は、1分あたり1度以下のゆっくりした速度で温度を下げていく「緩慢凍結法」だ。世界的にもこの方法が使われることが多いが、氷の結晶で細胞膜が壊され、死んでしまう危険性が高い。

04年に卵子の凍結保存を実施した国内16施設の平均成績では、妊娠率は13・8%だった。一方、加藤レディースクリニックがガラス化凍結法により凍結した卵子111個で行った体外受精の妊娠率は41%。日本国内の通常の体外受精の平均妊娠率よりも高率だ。

加藤レディースクリニックではこれまで、約100人の女性の卵子を凍結保存した。そのうち89人が乳がんや血液のがん患者で、未婚の女性も64人含まれる。

これだけの実績がありながら今回、桑山さんたちのグループが日産婦に「臨床研究」という形で未婚女性の血液がん患者の卵子凍結計画を承認申請したのは、将来の卵子凍結の普及に配慮してのことだという。

「採卵の際に、より注意の必要な血液がん患者さん300人ぐらいで卵子凍結の安全性と効果の高さをきちんと証明しなければ、日本では卵子凍結の門戸を広く開けることができなと思うので」

桑山さんは、がん患者に限らず、卵子の凍結を望む、未婚女性も視野に入れている。というのも一時期、妹の女友達からよく、

「私の卵子を凍結保存しておいてもらえないかなあ」

と相談を受けたのだ。妹たちは男女雇用機会均等法の一期生。懸命に仕事をしているうちに出産適齢期が過ぎ、まもなく出産可能期も過ぎようとしている世代だ。

「彼女たちの悩みはよく分かります。出産や育児の制度が整備されていないから、なかなか出産に踏み切れなかったですね。今も卵子の凍結保存を希望する健康な未婚女性の相談は後を絶ちません」

●英米は健康でもOK

アメリカやイギリスでは、健康な未婚女性も卵子を凍結保存できる。

生殖医療クリニックの許認可や、治療成績の記録などを行っているイギリスの政府の諮問機関「ヒトの受精及び胚研究認可局(HFEA)」※2のホームページでは、卵子を凍結保存するにはどこに行けばいいか、どんな処置を受けるのか、リスクはどれぐらいか、といった情報がすべて提供されている。そして次のようにも書かれている。

「HFEAは卵子の凍結保存を希望する理由、つまり未婚のがん患者なのか、社会的な理由で凍結保存を希望するのか、といった点については調査しません」

「社会的な理由」というのはつまり、自分のおかれた環境が出産に適していると思えるようになった時に出産したいと願う女性たちの人生設計を指している。

とは言え、イギリスでも卵子凍結数はそれほど多くない。従来型の緩慢凍結法を使うことが多く、成績がそれほどよくないこともあり、1999年から04年の間に卵子を凍結したのは185人。その卵子を使って妊娠に成功したのは10～15%の人で、実際に生まれた赤ちゃんは4人だけだ。

欧米でも、桑山さんが開発したガラス化凍結法は成績がいいと、注目されている。日本国内でも、少しずつ普及しつつある。

卵子だけでなく、卵巣の一部を凍結して保存しておくという選択肢もある。

こちらはまだ、確実に成功する技術が確立しておらず、研究段階だが、岡山大学医学部の産科婦人科と保健学科では昨年秋、血液がんの女性の卵巣の一部を腹腔鏡で採り、凍結保存した。慶応大学医学部産科婦人科や聖路加国際病院も卵巣凍結計画を立てており、それぞれの施設の倫理委員会の承認はすでに出ている。

いい時期が来るまで、若い健康な卵子をとっておきたい。日本でも、そんな女性の夢がかなえられる素地が整いつつある。

(編集部 大岩ゆり)

※1 臨床研究の申請をしたのは不妊治療施設で作る「A-PART日本支部」。
卵子凍結を受けられる病院の問い合わせは事務局(03-3366-1073)へ。

※2 <http://www.hfea.gov.uk/>